『檸檬』の主人公像

――「不吉な塊」の解釈を中心に――

坂井　健

梶井基次郎の小品『檸檬』の主人公を悩ませている「えたいの知れない不吉な塊」については、これまで何度も論じられてきたが、さまざまな見解があって、まだ解決していない。出典を指摘されつつも、あまり着目されなかった「売柑者之言」をとりあげつつ、『瀬山の話』の中の「檸檬」から『檸檬』への改稿の問題を考えることにより、「不吉な塊」とは、主人公にとって解決不可能であった、当時の「社会の虚偽」であることを論じた。

はじめに
（一）「えたいの知れない不吉な塊」に関する先行研究
（二）『瀬山の話』との関係
（三）「売柑者之言」について
おわりに

はじめに

梶井基次郎の小品『檸檬』の主人公はどんな人物なのだろうか？ともすれば、肺病を病んで、やけになって文学や芸術にふけり、酒におぼれ、学校をサボり、親をだましては金をせびり、友人からは借金を重ねる、そんなデカダンな不良学生に思える。だとすれば、そんな不良学生の手記をなぜ私たちは喜んで読むのだろう？主人公を悩ませている「えたいの知れない不吉な塊」とは何のことなのだろう？この問題については、これまで何度も論じられてきたが、さまざまな見解があって、まだ解決していないようだ。ここでは、出典を指摘されつつも、あまり着目されなかった「売柑者之言」をとりあげつつ、『瀬山の話』の中の「檸檬」から『檸檬』への改稿の問題を考え、「不吉な塊」について再検討し、主人公の人物像について考えてみたい。

（一）「えたいの知れない不吉な塊」に関する先行研究

研究者の立場から、本格的に作品を論じたのは、磯貝英夫氏である。氏は、次のように述べる。[1]

この作品の基調としての暗い不安の感情は、もちろん、作者の生活の退廃、不治の病、鋭敏すぎる感受性などの生んだものであるが、同時に、時代の一般的色調でもあったことに私たちは注意する必要がある。大震災（大一二）後の社会不安に象徴せられる、一種の崩壊感、焦燥・動揺・退廃はこの期に目だつ特徴であり、左翼思想の急激な登場、ダダイズムや新感覚派などのかなり狂躁的な文学運動の発生なども、そういう空気を母体にしている。

すなわち、「不吉な塊」とは、作者自身の問題であると同時に、時代の問題であるとしているのだ。

この点については、三好行雄氏も次のように述べて、同様の見解を示している。[2]

中原中也が〈手にてなすなにものもない〉朝のめざめをうたったのは、「檸檬」が書かれてからほぼ二年後の大正十五年五月であった。大正から昭和にかけてのいわゆる転形期は、時代の病に身をもってたちあう不毛な青春を強いつつあった。倦怠、虚無、終末感、絶望など、さまざまにいいかえることのできる病巣が青春の内面をむしばみ、かれらから現実の行為の可能性をうばうのである。「檸檬」の主人公もまた明らかに、

中也とおなじ疾患におかされている。治癒はかれ自身には不可能である。

『檸檬』の主人公が現実逃避によってしか、精神の均衡を保てなかったのは、時代の不安ゆえであった、とするのだ。

この他、相馬庸郎氏は、「近代の知的文化的重みが主人公の魂をゆがめた結果」であるとし、[3]増田修氏は「資本主義的虚飾・文化的浅薄さ・虚偽ともいうべきもの」と述べている。[4]比較的最近では、安藤摂子氏も増田氏の見解を踏襲している。[5]表現はちがっているが、いずれも時代背景に「不吉な塊」を求めている点で共通しているだろう。

こうした見方に対し、まったく別の立場を示したのが宮内豊氏である。宮内氏は、次のように述べる。[6]

> 主人公は「えたいの知れない不安」というがごとき、それこそえたいの知れないフィクションに悩まされているのではなく、度かさなる飲酒放蕩、放擲した学業、堆積する借金といったまったく現実的な問題に由来する《不安》に苦しんでいるのである。

このように「不吉な塊」は、実際上の不安であるとする。なるほど、梶井の当時の私生活から作品を見ていくならば、このような見方の方が分かりやすいだろう。しかし、作品本文には、「結果した肺尖カタルや神経衰弱がいけないのではない。また、背を焼くやうな借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。」とあり、このような解釈は、作品の表現と齟齬をきたすように思える。

さて、濱川勝彦氏も、宮内氏の論を受ける形で次のように述べる。[7]

> 「えたいの知れない」のは事実だが、その因ってくるところを暗示する部分もないではない。それは、丸善で見かけた書籍、学生、勘定台を「借金取の亡霊」とみたり、友人の下宿を転々とし、友皆登校の後の空虚さに堪えかね「彷徨」するところである。なによりも冒頭部分で否定された肺尖カタル、神経衰弱、背を焼くような借金が、その否定表現とは裏腹に、「私」を苦しめる要因であることを想像せしめる。しかし、これら具体的な事象は、すべて捨象され、あくまで抽象的に、かつ確かな存在として「不吉な塊」は位置づけられたのである。

このように濱川氏は、具体性を捨象された抽象的な存在

であるとはしながらも、本文での否定表現とは裏腹に、「肺尖カタル、神経衰弱、背を焼くような借金」が「不吉な塊」であると述べて、本文と解釈の齟齬を説明している。

以上のような研究状況の混乱を受けて、鷺只雄氏になると、宮内論の具体的な不安に加え、青春の未熟さ、さらに時代の不安が加わって「不吉な塊」が完成したのだとする。[8] 当時の梶井自身の退廃した生活を考えるなら、納得できなくもないが、このような見方をすると、かえって「不吉な塊」の本質が曖昧になりはしないか。

（二）『瀬山の話』との関係

ところで、『檸檬』が梶井の自伝的作品である『瀬山の話』の一部を独立させることで成立した作品であることは、よく知られているが、『檸檬』に書き換えられる時点で、冒頭に次のような変更が加えれている。

恐ろしいことには私の心のなかの得体の知れない嫌厭といおうか、焦燥といおうか、不吉な塊が――重くるしく私を圧していて、私にはもうどんな美しい音楽も　美しい詩の一節も辛抱出来ないのが其頃の有様だった。（『瀬山の話』のなかの「檸檬」）

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧さえつけていた。焦燥と云おうか、嫌悪と云おうか――酒を飲んだあとに宿酔があるように、酒を毎日飲んでいると宿酔に相当する時期がやってくる。それが来たのだ。これはちょっといけなかった。結果した肺尖カタルや神経衰弱がいけないのではない。また背を焼くような借金がいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がならなくなった。（『檸檬』）

この冒頭の箇所に与えられた変更について、濱川氏は次のように述べている。[9]

ここで注目すべきことは、この「えたいの知れない不吉な塊」が「私の心」とは別個に存在し、「私の心」と対等の、もしくはそれ以上の力をもったものとして位置付けられていることである。既述の「瀬山の話」では、「私の心の中の得体の知れない嫌悪といはうか、焦燥といはうか、不吉な塊が」とあつて、「私の心」の世界に「不吉な塊」は包摂されているのに対し、「檸檬」では、極端に言えば、精神と肉体との狭間に在って、別個に独立し、その両者を痛めつける生理的

病患のような存在になっている。

氏の指摘のとおり、『瀬山の話』では、「不吉な塊」は、心の内部に存在するのに対し、『檸檬』では、心の外部に存在するものとして捉えなおされている。しかし、そのことが「精神と肉体の狭間に在って、別個に存在し、その両者を痛めつける生理的疾患のような存在にな」ることを意味するのだろうか。

濱川氏は、先に引いたように、「不吉な塊」を具体性を捨象されたものとしながらも、「肺尖カタル、神経衰弱、背を焼くような借金」と捉えている。これはおそらく『瀬山の話』における主人公の退廃的な生活に引きずられた解釈であろう。

なるほど、梶井は退廃的な生活を送っていた。したがって、『檸檬』の主人公も退廃的な生活を送っており、「不吉な塊」も退廃的な生活に起因する、と考えるのは、一見、当然のように思える。したがって、『瀬山の話』の『檸檬』では、濱川氏の考える通り、退廃的な生活を送った結果生まれてきた「不吉な塊」であると解釈するべきであろう。だからこそ、「不吉な塊」は、心の中に存在したのである。ところが、梶井は『檸檬』において「不吉な塊」を心の外に存在するものとして書き直しているのである。すなわち、『檸檬』執筆の時点で、それは心の外部に存在するものとして認識しなおしたということになる。この点にこそ注目しなければならない。

しかも、梶井は、『檸檬』の初出で「不吉な魂」となっていたのを気にしていて、再録にあたって、書簡で「不吉な塊」とすべきことを伝えている。[10] したがって、「不吉な塊」は、「魂」のように個人の精神に属するものではなくて、外在する不気味な何物かとして考えるのが適当だろう。しかも、それは本文にしたがえば、「肺尖カタル、神経衰弱、背を焼くような借金」といった眼の前に差迫った問題とはちがった何物かなのである。

（三）「売柑者之言」について

先行研究を見ていて不思議に思うのは、「売柑者之言」についての記述があまり見られないことである。

私は何度も何度もその果実を鼻に持って行っては嗅いで見た。それの産地だというカリフォルニヤが想像に浮かんでくる。漢文で習った「売柑者之言」の中に書いてあった「鼻を撲つ」という言葉が断れぎれに浮かんで来る。

本文にこのように書かれているのである。先行論の教えるとおり、「檸檬」は「不吉な塊」に対置されるものであるから、「不吉な塊」を考える上で、この部分は重要だと思われるのだが、中島国彦氏は、次のように述べるだけである。[11]

「明の劉基（覆瓿）が書いた風刺文で『続文章軌範』巻之二に収録。原文には、「予留得其一。剖立如烟撲口鼻」とあり、「口鼻を撲つが如し」で、烟のようなものが出て口や鼻を撲った、の意。「予」はひからびた柑を買わされたのであり、この匂いは「匂やかな空気」どころでなく、腐った匂いに他ならない。梶井がそれをここで、やや原文から離れる形で引用したのは、コンテクストを無視して「撲つ」という用語のおもしろさに眼を向けたためだろう。独特の表現が文脈を超えて、そのものの特異さで記憶されることは多い。梶井の感性が言葉に接した時どう働くかを、この一節はよく示している。

このように、「売柑者之言」が「不吉な塊」とどう関わるのか、作品の解釈とどうつながっていくのか、全く触れられていない。

ちなみに、当時の漢文の教科書であった『続文章軌範』に収められている「売柑者之言」（原典は、劉基の『誠意伯文集』）は、次のような話である。

杭州に果物を売るものがいて、蜜柑の貯蔵がうまく、夏冬を経ても、形が崩れず、つやがあってきれいであった。私が買ってきて割ってみると、煙が出るように、臭みが鼻と口をついた。外観ばかりきれいで中身の腐ったものを売って人をだますとはひどいではないか、というと、蜜柑売りは、うわべを立派に飾って、中身が腐っているのは、軍人も政治家も同じであるのに、なぜ自分の蜜柑ばかりに文句を言うのか、と逆に言い返された。私は言い返すことができなかった。

作者の劉基は、明開国の功臣で、この文は蜜柑売りの言葉に託して、世の中の虚偽を暴こうとしたもので、なかなか風刺の効いた話である。檸檬の匂いをかいだ主人公がこの話を思い出したということは、取りも直さず、社会の偽善あるいは虚偽を意識したということである。だとすれば、丸善に置かれた檸檬爆弾が爆発するということは、檸檬によって丸善に代表される当時の最新の文化の虚偽性を暴くことを意味するだろう。主人公が丸善で西洋の画集をごち

やごちゃに積み重ね、檸檬をその上に置くクライマックスの場面は、次のように書かれている。

見わたすと、その檸檬の色彩はガチャガチャした色の諧調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまって、カーンと冴えかえっていた。

「見すぼらしくて美しいもの」、単純でよいものの象徴である「檸檬」が、ハイカラで文化的な画集の醜悪さを吸収してしまい、不思議な、けれども圧倒的な美しさを発揮している場面である。

「檸檬」によって、見かけだけ立派だが、中身は腐っているハイカラな文化の虚偽が暴かれた場面であるといってもよいだろう。

ところで、主人公が「カリフォルニヤ」を思い浮かべることについて、古閑章氏は、「レモン爆弾で丸善を爆破することはアメリカ文化でヨーロッパ文化を破壊する意味を持っている」と述べている。[12]「檸檬」がアメリカ文化を象徴するという考え方には、賛成できないが、ヨーロッパ文化に代表される当時の権威をもった文化に対立するものである、とまでは考えることができるだろう。なぜなら、「檸檬」は、「見すぼらしくて美しいもの」の象徴だからである。おそらくは、「カリフォルニア」も、そうした権威をもった文化の対極にあるものとして意識されたのであろう。新大陸「カリフォルニア」も、既成の権威に対するものとして意識されたのだろう。

おわりに

要するに、「不吉な塊」とは、当時権威をもっていた文化の偽善・虚偽だということになるだろう。だが、それは、文化に限定しない方がいいかもしれない。というのは、丸善は、西洋文化の輸入を代表する場であり、西洋文化の輸入とは、とりもなおさず近代化そのものだからである。だとすれば、『檸檬』の主人公は、近代化そのものに不安を感じていたことになる。だからこそ、主人公は裏通りや安物のおもちゃと幼児の時の感覚に魅かれたのである。

「不吉な塊」は、文化の虚偽であると同時に、磯貝氏や三好氏の指摘するように、近代化に伴って生じてきた、当時の社会的不安を含むと考えるのが妥当だろう。まもなく、日本は軍国主義と戦争への道を歩むことになる。

このような社会で勤勉に勉学にはげみ、出世街道へと邁進することは、結果的にそのような社会を支配している権力に加担することになる。そうした社会で潔癖に良心を守ろうとするならば、現実逃避か落伍者となるしかない。

梶井は、『瀬山の話』から『檸檬』に改稿する際に、このことに気づいていたにちがいない。『瀬山の話』は、ただの自堕落な学生の手記に過ぎなかったが、梶井は、『檸檬』執筆の際に、自分をそのような現実逃避に追い込んだものの正体に気づいたのだ。

『檸檬』の主人公は、そのような社会の虚偽に気づき、それとはなしに告発している、そんな人物なのである。

注

（1）磯貝英夫「梶井基次郎―鑑賞『檸檬』―」（伊藤整編『現代日本文学講座』（六）三省堂、昭和三七年六月）

（2）三好行雄「檸檬（梶井基次郎―現代文学鑑賞）」（一）（二）、『解釈と鑑賞』昭和三八年一一月、三九年八月）引用は、「青春の虚像」（『作品論の試み　三好行雄著作集』（筑摩書房、一九九三年）による。

（3）相馬庸郎「梶井基次郎『檸檬』」（『日本文学』昭和四〇年一月）

（4）増田修「梶井基次郎『檸檬』小論―」（えたいの知れない不安〉をめぐって」（『日本文学』昭和五五年四月）

（5）安藤摂子「梶井基次郎『檸檬』論」（『玉藻』四一号、平成一三年一一月、フェリス女学院大学国文学会）

（6）宮内豊「檸檬と爆弾」（『檸檬と爆弾』小沢書店、昭和四七年、初出は、昭和四四年）

（7）濱川勝彦「鑑賞『檸檬』」（濱川勝彦編『鑑賞　日本現代文学　梶井基次郎　中島敦』（角川書店、昭和五七年一月）所収）

（8）鷺只雄『檸檬』（『国文学　解釈と鑑賞』平成一一年六月）

（9）注（6）に同じ。

（10）中島国彦「テクスト評釈『檸檬』」（『国文学』昭和六三年一二月）

（11）淀野隆三宛書簡・昭和六年四月十三日）「レモンで不吉な塊といふところが重ね重ね　不吉な魂となつてゐる、こんなところは反復してゐるから君にもその誤植であることが判別がつかないと思ふので直した。」

（12）古閑章「梶井基次郎『檸檬』の表現構造」（『熊本大・国語国文学研究』平成九年二月）

※本文の引用に当っては、新字・新仮名に改めた。